

第 59 回

# 読売教育賞

## 受賞者論文集

「実践活動の概要」



2010年(平成22年)  
読売新聞社



## 高原のように、雄大に、爽やかに、 人々に尽くす。

社会福祉法人 高原福祉会の理念

本冊子は、「読売教育賞 最優秀賞」の幼児教育・保育部門で受賞した原稿を抜粋したものです。

子どもは精神的にも・肉体的にも未熟であり、保護や教育が必要であるという観点から、子どもが権利を行使する際に不十分な部分を親や代理人が補うべきと、児童権利に関する条約に記されています。

特に就学前の乳幼児は、その後の子どもの成長にとって非常に大切な時期です。日々の生活の中で十分に愛されて、相手を信頼する心を育み、自らの力に自信を持つ。

こうした愛情を注げるように努力することは、母親以外にも父親や祖父母、保育者や地域の人々らで注ぐことは可能です。現に保育園では、保育士達がそうした養育行動を発揮しています。

乳児を抱き、笑顔であやし、食事を与えるという行動は、いずれも子どもが感じ取る触覚、聴覚、視覚、味覚等の情報として子どもへと伝達されます。その情報も一方的に与えればよいものではなく、子どもの気持ちに合わせて応答的に与えることが大切です。

子どもが何かに関心を抱いて動き出したら、その目的を達成し満足できるように周囲の大人はその場が安全であるのかどうか確認し見守る。それが自ら育つ力を発揮する原点になるのです。そして危険なことは乳児期からしっかり伝える必要があります。

子どもの発達過程や、そこで大人がどういう影響を及ぼすのかと言うことは、多様で個別性の高いものです。

それは母親であっても、置かれている生活環境が厳しい等の要因が、苛立ちやストレスを強め、結果的に子どもに適切な愛情を注げない事例も増えています。

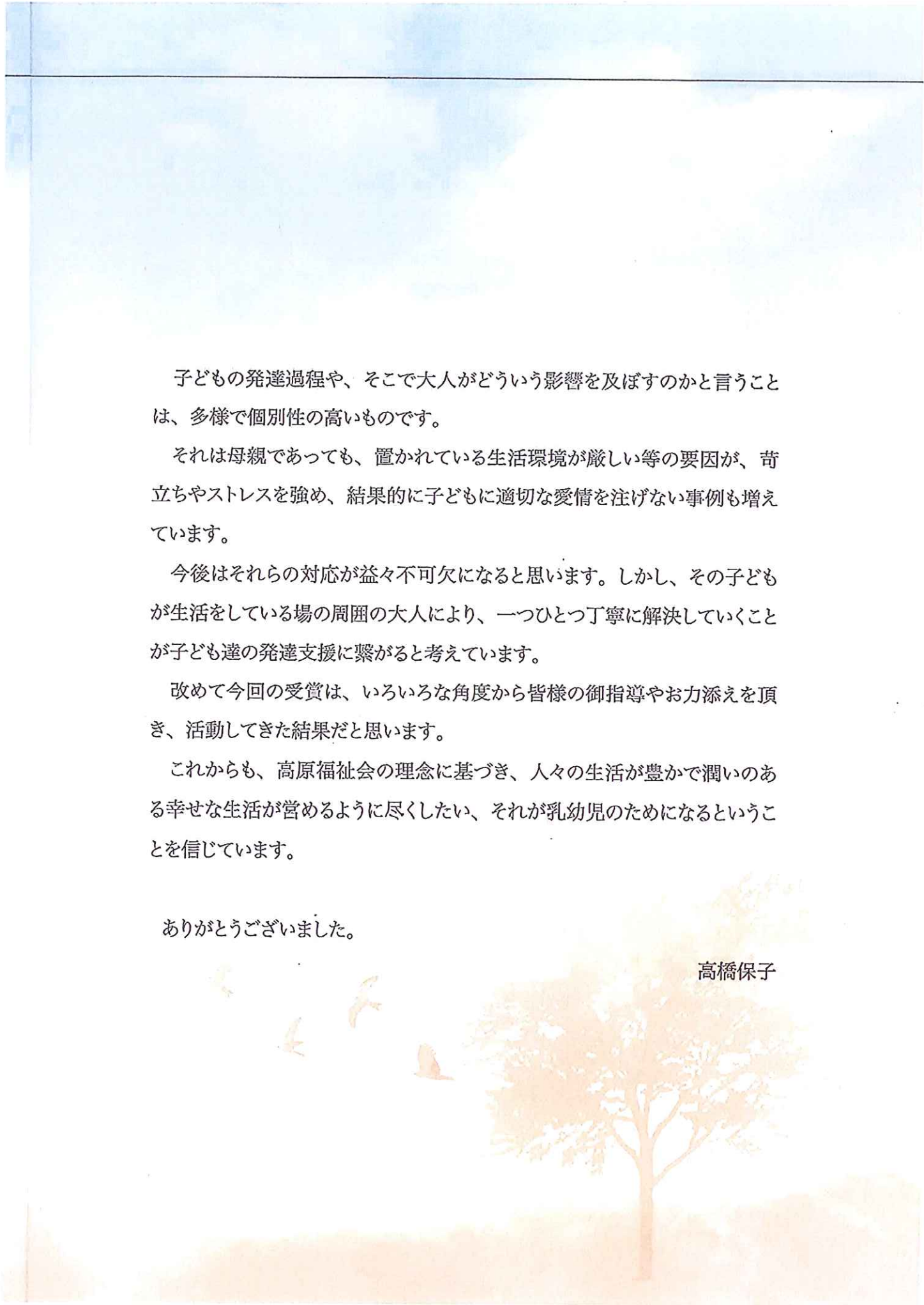
今後はそれらの対応が益々不可欠になると思います。しかし、その子どもが生活をしている場の周囲の大人により、一つひとつ丁寧に解決していくことが子ども達の発達支援に繋がると考えています。

改めて今回の受賞は、いろいろな角度から皆様の御指導やお力添えを頂き、活動してきた結果だと思えます。

これからも、高原福祉会の理念に基づき、人々の生活が豊かで潤いのある幸せな生活が営めるように尽くしたい、それが乳幼児のためになるということを感じています。

ありがとうございました。

高橋保子



第59回 読売教育賞から  
【幼児教育・保育】

■ 幼児教育・保育 社会福祉法人高原福祉会  
高橋保子理事長（東京都）

乳幼児保育に半世紀以上携わってきた。現場では子どもたちが生まれつき持っている「育つ力」を支援することを心がけてきた。体を動かさず表情も変えない、自傷行為をやめないなど、健全な発育とかけ離れた乳幼児を預かった経験から「思いを読み取り、発育を手助けするようにかかわることが大事」と力説する。手足をバタバタと動かし、たり震えたりした際は、すぐトイレに連れて行く。排便、排便のサインを見逃すと、オムツ離れが遅れてしまふからだ。オムツを外せ



幼児と食事の時間を過ごす高橋さん

子どもの「育つ力」支援

る時期を迎えた子どもたちは、それぞれの排便の間隔を丁寧に記録している。また、①舌を鍛えて言葉を話せるようにするため、哺乳瓶の吸い口はSサイズ②知能の発達を促進させるため、4歳以上は昼夜をさせずに遊ばせる——など独自の保育を実践。心理学や医学を学び、研究と実践から編み出した保育方針は、家庭でも取り入れるよう保護者にも訴えてきた。卒園生は2万人を超え、「主体性があつて積極的に行動する」などと入学先の小学校で高い評価を受け、保育の成果に手応えを感じている。（蔵本早織）

小川博久・聖徳大学教授  
「具体的で豊かな幼児理解によって記録が書かれ、統合保育の理念に基づく研究となっている」

【最優秀賞選評】 小川博久 聖徳大学教授

「問題をかかえる幼児に対し、医学的知見をふまえて、日常の保育の中で実態を的確に診断し、記録し、日々の保育を反省し、父母とも交流し、アドバイスする。具体的で豊かな幼児理解によって記録が書かれ、統合保育の理念に基づく研究となっている」

